

岩永 雅也さん

放送大学長



いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高一東京大卒一同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チョウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

ろんだん 佐賀

小さな厚手のオーバーに身をくるみ、東京で教職を得た父親と一緒に国鉄肥前山口駅（現JR江北駅）のホームに少し震えながら立つていた3歳の少年は、やがて滑り込んできた急行「雲仙・西海」の三等車に乗り込んだ。まだ見ぬ東京という町のこと、そこで待っている新しい母親との生活のことなど、不安だらけで、それでいてどこか新しい世界への扉を開けに行くような不思議な高揚感を覚えながら、ほぼ丸一日、初めて見る車窓の景色に見とれつつ、時々とうとうしながらも、23時間以上におよぶ満員列車の旅の末にようやく東京に到着した。

鉄道も通わない嬉野の温泉町からさらに峠に向かつて登っていく吉田の茶作り村しか知らない少年の目に当時の東京がどう映った

佐賀生まれの関東人

故郷は遠きにありて想うもの

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

話を何度も聞かされたものだ。それから60有余年、嬉野への帰省機会は冠婚葬祭などを除くとほんの数回にとどまり、東京と千葉の都県境に近い何力所かの町で教育を受け、仕事をしてきた。つまり、良くも悪くもほぼ完全な「関東人」となり、佐賀弁も耳にかからなくなっ

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔

か。今となつては記憶も定かでないが、ただ一点、周囲の人たちの話しかける標準語がほとんど理解できなかったことには強烈なストレスを感じていたようで、今は亡き父親から「雅也は『（皆の話が）いっちゃん耳なかからん！』といつも泣いていたなあ…」と、昔